

べきものはX線診断である。X線診断の基礎として現在欠くことのできぬものは放射線防護に関する知識と防護の具体策である。さらにX線写真についての理論であろうと考える。それにはX線物理学の理解が必要である。限られた教育時間内でこの教育を能率よく行うにはいかにしたらよいか。これには実験を行いつつ講義を行うことだと考え、以下に記すような特殊な装置を作製し、教室でこの装置を用いて、テレビジョンと組合せて、X線量測定、AlによるX線の減弱の様相、散乱X線発生量と照射野の大きさの関係などについて実験、示説しつつ講義を試みている。

装置の概要 1. X線発生装置(26×20×30cm)

2. 電離箱保持装置 3. フィルター保持器 4. アルダソーン頭部ファントム

以上のものは実験時には鉛裏装鉄板製箱形X線防護壁(36×41×100cm)の内側にセットする。この箱の長軸方向一次X線照射面には鉛ガラスで防護した着脱自由な蛍光板を備えてある。以上のセットはキャスター付の運搬台にのせて自由に移動できる。これを講演会場に、はこび、あらかじめ準備しておいた大形テレビジョン2台を用いて、その利用法を解説し散乱X線と照射野面積との関係をピットマンX線線量計で測定、線量計の目盛りをテレビカメラで大写しとして会場の方々に示説を行った。本発表を行ったのはこのような装置を利用して教育を実施したいとの演者の長年の希望が達せられたことを本学当局に感謝の意をも表したいからであった。

演題16. 歯胚培養細胞の走査電子顕微鏡像

1. 細胞の遊走と細胞間結合について

○名和 橙黄雄, 石関 清人, 立花 民子

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

新生仔マウスの臼歯歯胚を顕微鏡下でできるだけエナメル上皮が残るように余分の組織をとりのぞき直接カバーガラスに貼りつけて培養する。この培養によると移植片から遊走する細胞は大部分が上皮性の細胞である。移植片から遊走する細胞間の結合に次の四型がみられる。

I. もっとも移植片に近い所では細胞境界は不明でそれより外側では細胞境界は多数の微絨毛の集積から形成される。

II. さらに外側で細胞の遊走が進んでいる所では細胞間結合が広がり、櫛状の細胞間突起により結合がなされている。

III. IIよりも遊走が進むと、櫛状の細胞間突起の先端から結合が遊離し、その先端が自由に伸びて他の細胞表面を遊走するようになる。

IV. 移植片から遊走した最外層の細胞周辺には非常に長い細胞突起がみられ、結局これらの細胞は隣接する細胞から離れて、単独で遊走を始める。

他方、培養細胞表面には多数の微絨毛がみられる。微絨毛の数は移植片近辺の細胞には少なく、辺縁部の活動的な細胞に増加する傾向があり、また培養時間とともに増える傾向がある。同時にまた微絨毛の長さも増加する。培養細胞における微絨毛の数と長さの増加は培養環境に対する1種の適応現象と考えられる。

質 問: 野 坂 洋一郎(口解I)

口腔諸組織の培養にあたり、mediumの選択に何か良い指標がありましたらお教え下さい。

解 答: 名 和 橙黄雄(口解II)

培養する材料と培養液の問題は非常にむずかしい所であるが、Eagle MEMで十分培養が可能である。

演題17. 我が教室で経験した Ameloblastoma における組織型の複合性について

○竹下 信義, 野田 三重子, 畠山 節子, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

我々は経験したエナメル上皮腫27症例について Plindborg らのWHO分類に基づいて病理組織学的に検討を加えた結果、興味ある知見を得たので報告する。

結 果

1. 性別および年齢別症例数

性別では男性が15症例(56%)、女性が12症例(44%)であった。また年齢別症例数では10才代から30才代に発現しているのが全体の60%を占めていた。発現平均年齢は33.2才である。

2. 発現部位別症例数

下顎に圧倒的に多く発現(85%)していた。また発現部位は下顎小臼歯一下顎枝部に多く発現(81%)していた。